

## 松浦鎮信の茶道理念 (I)

——大名茶としての自己形成——

### The Philosophy of Matsuura Chinshin School:

### A Daimyo's Self-identity Through Tea Ceremony

安 部 直 樹

Naoki ABE

#### 要 旨

茶道の流派のなかに、町人茶に対して武家茶の流れが存在する。更に、武家茶の中でも大名茶と呼ばれる独特の流れがある。

ここでは「松浦鎮信の茶」を考察するところから、松浦鎮信という大名がどのような人々の影響を受けつつ、鎮信流と呼ばれる独自の茶道理念を形成したかを追跡する。

#### キーワード

時代、茶道、為政者

#### はじめに

信長、秀吉、織部、遠州、石州、不昧、直弼らは多くの茶道史の書物の中で言及されているが、鎮信はほとんど触れられていない。茶道界全体に対する影響が少なかったのであろうか。しかし鎮信は易経、天文、蘭学、国典漢籍、禅、兵法などの思想、学問、哲学、宗教を多岐にわたって学び、茶道の理念にもそれらの学問や思想の影響がみられる。また、大名という為政者の立場から藩士へ茶を広めていくという役割もあった。「経国済民」の思想を根底とする鎮信の茶は、茶道という自己達成の領域を超えた茶道であると考えた。現在も脈々と受け継がれている鎮信の茶道は大きな意味を持つとの認識から、鎮信の茶道と政治の関わりを検証してみた。

#### 第1章 松浦鎮信と江戸幕藩体制

##### 第1節 松浦鎮信の時代背景

松浦鎮信は天和8年(1622)に生まれ、元禄16年(1703)に死去する。鎮信は寛永14年(1637)に藩主となり、元禄2年(1689)に引退

している。従って、藩主となった52年間が実質的に時代の影響を受けたと解されるのである。時代は寛永・正保・慶安・承応・明暦・万治・寛文・永宝・天和・貞享・元禄という11の元号にわたっている。

3代将軍家光(1623～1651)の時代、鎮信は藩主となったのである。この時代は朝廷より幕府へ権限が完全に移されていく時代であった。幕府は公家と共に、社寺に対しても、統制を加えていく。やがて慶安四年(1651)に3代将軍家光が病死し、家綱が将軍職を継いだ。当時、幕府においては官僚組織が整えられるにつれて、戦闘部隊である旗本の役割は低下するに到った。時代は平和になっていく。しかし2,000余の牢人と囚って由井正雪等の謀反が起こる。こうした中で、20数万の牢人を制する為、幕府は武断的な抑圧政策を修正して、文治政策に乗り出していくのである。また、各藩は財政的基盤を高めるために、貢租の徴収を強化したが、農民の抵抗を生み、百姓一揆が各地におきこる。

将軍家綱の治世は30年にも及んだ。従って鎮

信にとっては家綱の時代が主な時代となるのである。鎮信が引退する1689年に綱吉が5代将軍となる。寛文(1661～)元禄(～1704)にかけて、学問が隆盛になった。綱吉は朱子学を重んじ、儒学を奨励した。諸藩でも藩校が作られ、武士ばかりでなく、庶民も教育の対象とされた。ここに文治政治の特徴が見られる。

1600年代中頃より、朱子学者によって武家の道徳としての武士精神が尊ばれるようになり、それは、近世以前の御恩と奉公に基づく功利的な主従道徳と異なっており、臣下に対して主君への一方的な没我の忠節を求めるものであった。これは、幕藩体制が確立して、主従間の秩序が強化されたこと、他方武士が遊民化して軟弱になりつつあったことの反映であった。一方、鎮信に影響を与えたといわれる山鹿素行は江戸前期の儒学者で古学派の創始者、朱子学を批判し、孔孟の教えを学ぶ古学を提唱した。「聖教要録」を著したため、幕府から処罰を受け流罪となった。またこの時代は「家」というものを単位として、その社会的格式あるいは身分的序列が構成されており、家長は絶対的権限を有していた。江戸時代中期より大名の領国支配体制を「藩」と表現した。そして、その藩主の後継ぎを巡って、黒田藩寛永9年(1623)、高松藩17万石寛永14年(1637)、若松藩40万石寛永18年(1641)に御家騒動がおこり、鎮信は当然こうした騒動の影響を受けていると考えられる。つまり、家長の家督相続に対し、重臣による藩政の主導権をめぐる、対立の図式がいろいろとおこり、鎮信もまた家臣への配慮を余儀なくされた。

## 第2節 松浦鎮信の平戸藩政治

第40世松浦素氏によると、「鎮信は若年のころより文武の道に励み、神書を橘三喜、吉川惟是から伝えられ、天文を秋山忠右衛門、横田才庵に学び、また蘭学に通じ、国典漢籍を文庵、玄覺に受け、禅は隠元木庵、道者元、沢庵に参じ、法話を盤畦禅師に、易を不破慧庵に聴き、

書を玄陳に習い、武田氏の兵法を慕い、しばしば山鹿素行を招いて、その学を講習し、その弟平馬を家臣として禄千石を与え、その子高基には女国子を嫁せしめた。外に、諸武術の修養、勉学に励んだ」(松浦素「茶道の心」)<sup>1)</sup>とある。ここから読み取ることができるのは、鎮信は多くの学問と知識の分野から、総合的、体系的に自らの思想をまとめあげ、そこに鎮信流という茶道理念が出来上がったということである。松浦鎮信は16歳(寛永14年)にて平戸藩主となるのであるが、その人生は波乱万丈の中にあった。第36世松浦心月によれば、「和蘭船平戸に來り交易す。16年、幕府港を長崎に移す、爾來平戸の商売利を失うを以て市外の地錢を減じ、又課役を免す。公夙に心を民政に尽くし専ら利を興し害を除くを以て急務と為す。舊來藩制士禄皆領った采地を以てす。故に或いは壇に農民を役して、力を耕耘に尽くすことを得ざらしめ、田地荒蕪に歸するもの多し。公之を憂へ士禄皆之を廩米に取らしめ以て永制と為す。慶安元年大に年有り。米五千苞を以て士に領賜し、河を尊きて水溢を防ぐ。其の他田疇を開墾<sup>2)</sup>し、民庶をして其の生を遂げしむる者勝げて数ふべからず。又諸所の海岸を築き、民を移して漁業<sup>3)</sup>、商業を営ましめ及び諸の工業を勸奨す。今の三川内陶工場<sup>4)</sup>の如き、実に公の時に始まれり。承応四年、允を得て長崎に七所に砲台の築く。寛文三年三月、暇を請うて西に歸る。伏見に到り長崎火を失い、奉行所も亦災に罹ると聞き、大阪に抵り、之を罹災者に領と賜ふ。衆皆感涙し、奉行所再造の拳を賛けんことを請う。公幕府の許可を得て其の事を督す。七年、幕府の巡国使岡野孫九郎井戸新右衛門、青山善兵衛、平戸に來り按驗す。三使政令の清廉を聞き、庶民の安寧を見、称して九州第一の治政と為す。……」(「心月庵と鎮信流茶道」)<sup>5)</sup>

「從來平戸は、慶長14年(1609)よりオランダ国と交易を開始し、同国の商館を設けるにいたって長く外国貿易の唯一の開港地<sup>6)</sup>としておおいに繁栄を誇ったが、寛永16年幕府が長崎

の出島に同商館を移転したため、商交の利を失い、封内の経済は沈滞後退し、何等かの対策を要する事態となった。そこで、重信は27年の長年月わたり、おおいに力を政治、経済の振興に注ぎ、市外の地銭を減じ、課役を免じあるいは新田を開きその他、利をおこし、その結果寛永七年(1667)幕府をして九州第一の政治賞せしむるまでに復興せしめました。又、寛文8年3月には、小笠原長勝とともに島原城をせめた。まことに整然とした戦いに、まわりの者は感嘆の声を上げたということである。元禄2年(1689)7月に隠退し、8月に薙髪して鎮信と改めた。同16年10月6日、82歳をもって本所の別邸において歿した。」

又、「平戸藩史考」(三間文五郎著)によれば、「宗陽公の子天祥鎮信は藩を継いだが、16歳で島原の乱<sup>7)</sup>にあい、討伐の命を受けて出征し軍国多事であった。また、浮橋主水事件<sup>8)</sup>によって神経をとがらしている幕府は、出征中の松平伊豆守を島原より途中平戸を視察せしめ、また品川東海寺の僧江月和尚をして、平戸の宗教状態を調査せしめ、寛永6年に、鎖国令が公布された。翌17年には井上筑後守を平戸につかわして、和蘭商館を破壊せしむる等の事あり。平戸では大きな騒動であった。一步誤れば領地没収か移封かの厄は免れ難き情勢であった。平戸藩、熊澤大膳はじめ数名の藩士は此の厄難を救済する事に必死の努力を致した。即ち江月和尚に懇請して、此の間善所の方法を講じたのである。かつて江月和尚は幕命をおびて平戸に來りなば松浦家にとっては、救主の到来と映ったのである。鏡川の小川庵に迎えて厚く之を待遇し、其の内意によりて急速に伽藍を建立し、士民には神仏を信ずる誠意を表示せしめ、各所に三界萬靈塔を建立せしむるなど、江月和尚はこの間の事情を幕府に報告復命して、異教嫌疑を解く事に斡旋したのである。寛永16年、大膳と主水は幕府評定所にて対決した。大膳が『貴様は不埒である』と叱しければ、主水、立所に縮恐して、対決は即決して主水は伊豆の大島に流

罪せられて、平戸の切支丹嫌疑事件は無事解決を見るに至った。」

以上のように、鎮信は藩主に就任するやいなや、4年後(1641)にオランダ商館は、長崎出島に移転。その後松浦藩は商売の利益を失い衰退のやむなきに至った。このため、鎮信の苦勞は大きかったと思われる。しかしながら、その逆境を跳ね返し、民意を興し、財政を立て直していくのである。その間、農民・漁民への配慮、又、部下とはいえ平戸藩士への心配りなど、他の藩では経験し得ない辛酸を経験し、幕府の巡国使より、九州第一の治政といわれるほどになったのである。

## 第2章 松浦鎮信の茶道理念

松浦鎮信は家光・家綱の時代に生きた。時代は安定期に向かう一方、不満分子の浪人らによる世情不安、武家の道徳としての武士精神は朱子学の影響を受けていく。更に、家長の絶対権限の裏に家督相続をめぐる藩政の主尊権争いが頻発した。平戸においても島原の乱、キリスト教禁止令<sup>9)</sup>、浮橋主水事件等が、鎮信の心を不安にさせていくのである。

鎮信は、山鹿素行の「士道」論を学び、沢庵宗彭の禅宗を会得し、更に禅をもってなる盤珪へ教えを乞い、茶道の精神の中に自己の安定と悟道の心を求めていたのである。それは井伊直弼が激動する幕末の時代に徳川幕府による政治を志向しようとするときの困難を乗り越えるために、心の安定を茶に求めていたことと共通するのである。井伊直弼の茶の心に共通するものがあるといえよう。

一方、鎮信は大名という為政者でもあった。オランダ商館が長崎に移り、急速に疲弊する平戸経済を立て直すことが急務であった。その為、田疇を開墾、海岸を築き漁業、商業、工業を奨励し、三川内陶工場を始めるなど、経済の振興に力を注いだのである。このように、民意を興し、財政の立て直しをはかるには、何はさておいても、平戸藩士の道徳観の確立が大切で

あった。

鎮信は「文武は武家の二道にして、茶湯は文武両道の内の風流なり。さるによりては柔弱をきらふ。つよくしてうつくしきをよしとす。」(「茶湯由来記」)<sup>10)</sup>と述べている。「武士道」あるいは「士道」において、武士はいかにあるべきか。茶湯と文武両道との関係を力説した鎮信は、その理想的なあり方を「つよくしてうつくしき」という点に求めている。それはとりもなおさず、鎮信が武士のあるべき姿を「つよくしてうつくしき」に求めたことに他ならない。この「つよくしてうつくしき」という武士道を学ぶことによって鎮信の人間像が形成されていくのである。鎮信の人間形成に影響力をもった人物が山鹿素行・沢庵宗彭・盤珪和尚であった。この3人の思想を鎮信の茶道理念に照らし合わせてみた。

### 第1節 強くして美しき茶

#### 一山鹿素行の士道論とのかかわり

山鹿素行(1622～1685、天和8年～貞享2年)は、当時朱子学が仏教哲理などの影響を受け、抽象的な議題に終始し、ともすれば主観的な反省や思索に流れ、実践を看過していると批判した。おしなべて、宋、明期に成立した朱子学、陽明学に雑多な要素が混淆していると考えた。素行は、周公や孔孟などの聖人の思想に依拠して、儒学本来の教えと実践的な立場とに戻ることを主張し、徹底的な武士階級擁護の立場を展開、儒学の理論によって為政者としての武士のあり方、すなわち「士道」を体系的に明らかにすることを最大の関心とした。「山鹿語録」の中で素行が士道のあり方について次のように述べている。例えば「知己職分」ということに関して

凡ソ士ノ職ト云ハ、其身ヲ顧ニ、主人ヲ得テ奉公ノ忠ヲ尽シ、朋輩ニ交テ信ヲ厚クシ身ノ独リヲ慎デ義ヲ専トスルニアリ。

「おおよそ藩士の職とは、自己の身を省みて、主人(藩主)を得て、奉公の忠節を尽

くし同輩に交わってその信頼を厚くし、自分自身を慎んで、仁義を重んじる。」

ここで、藩士としての心構えを素行は述べているが、鎮信もまた同じくこの考え方の中に、松浦藩士としてあるべき姿を映していたのであろう。更に続けて素行は次のようにも述べている。

而シテ己レガ身ニ父子兄弟夫婦ノ不得已交接アリ。是又天下ノ万民各ナクンバ不可有、人倫ナリトイヘドモ、農工商ハ其職業ニ暇アラザルヲ以テ、常住相従テ其道ヲ不得尽。士ハ農工商ノ業ヲサシ置テ此道ヲ専ツトメ、三民ノ間苟クモ人倫ヲミダラン輩ヲバ速ニ罰シテ、以テ天下ニ天倫ノ正シキヲ待ツ。是士ニ文武之徳知不備バアルベカラズ。……。士トシテ禄ヲ得、禄ヲ求ムルノ輩、身ノ職分ヲバ聊シラズシテ禄ヲ貪ラン事ハ、心ニ恥ル処ナクンバ不可有也。故ニ士ノ本トスルハ在知職分トハ云ヘル也。(「岩波思想体系 山鹿素行」)<sup>11)</sup>

「自らの境遇には父子兄弟夫婦の交わりがういてまわる。これは多くの人々が必然としてもっているものである。どのような人生であっても農工商に従事する人は、一生懸命働いて、その道を尽くす人々になることである。藩士は自分の仕事に専念し、こうした職業の人々が人生を乱すときには罰し、世の中に天の倫理の正しさを証明する。このため藩士は、文武両道において徳を備えておかなければならない。藩士として禄を得、禄を求めている者が、自分の職分を知らず、みだりに禄だけを求めるのは恥ずかしいことである。従って大切なのは、自分の職分をよく認識しておくことである。」

この山鹿素行の思想は鎮信にも強く受け継がれている。藩士が文武両道において徳を備えて

おかねばならないと述べていることが、そのまま鎮信流の理念にもなっている。すなわち、「文武両道の内は風流なり。さるによりては柔弱をきらふ。つよくてうつくしきをよしとす」（『茶湯由来記』）<sup>12)</sup> という一言である。また素行は「敬」を重視し、「母不敬」ということを強く主張している。

凡ソ礼ハ其ノ本心ノ不得止ノ処ヨリ出生シテ、事物ノ上ニ自然ノ節アツテ、其ノ文章儼然トシテヲカスベカラズ、斐然トシテアヤミルベキ、是ヲ礼ト云。身上ノ動静悉礼ノ用タレバ、一動一静一語一黙各礼節アリ。礼節ノ本、母不敬ノ三字ニキワマレリ。其ユヘイカントナレバ、語黙動静ノ間ニ詳ニ思テ其節ニアタラン事ヲ計ラバ、不中ト云デモ不遠ノコトワリナリ。何ノ思イハカル処ナク、唯当座ニ任セテ是ヲイタシ、情欲ニ從テ発セシムルヲ以テ、非礼ノ用多ク、威儀ココニ絶ス。事物ノ間ニヲイテ常ニ思フ深クシ詳ニ慮ラバ、各当然ノ則ニ近カルベシ。是ヲ母不敬ト教フル也。サレバ母不敬、儼トシテ若思ト云ヘリ。若思ト云ハ、事物ノ上ヲヲロソカニ不仕、常ニツツシミオゴソカニシテ輕忽ナラシメズ、詳ニ慮リ具ニ思フベシ、是レ礼ニ叶ノ本也ト云ヘル心也。敬ト云ハ、黙シテ不云、形ヲチヂメテ不動ヲ云ニアラズ、事々ニオイテ疎ニセズ輕ンゼズ、能其理ヲ究メハカルノ謂也。疎ニシ輕ズルトキハ、怠出来テ心ココニ放失シ唯情欲ニマカスルノミ也。師尚父ガ武王ニ告奉リシ丹書ノ言ニ曰、敬勝怠者吉、怠勝敬…。

礼節が全ての基本であり、母不敬（けいせずということなかれ）が中心である。日々の生活の一挙手一投足全てに礼がある。動くこと、静かなること、語ること、黙すること全てに礼節がある。ただ、行き当たりばったりであったり、感情で動くと礼を失う。全てのことに思慮深く、慎重であれば、作法にのっとる。これを母不敬とい

う。思慮深いということは、全てに心をしておろそかにせず、いつも慎み深く厳かであることである。更に、敬とは口数少なく、動作も少なく、事を疎んじることなく軽んじない。（『岩波思想体系 山鹿素行』）<sup>13)</sup>

#### 慎容貌之動

師嘗曰、容貌ハ天命ノ性心ヲ入ルル処ノ器也。内ノ思イ不正トキハ、容貌ココニ傾テ其ノ表外ニイチジルシ。容貌ヲタダサントスルナラバ、内ニ思フ処ヲ可糾明也。思内ニアツテ色表ニアラハレ、内外表裏本末一貫ノ天然ナレバ、更ニ差別ヲ不可存也。古ノ君子容貌ヲツツミテ威儀ノ則ヲツマビラガニスル事、尤可案。礼記曰、君子之容遲舒トイヘリ。遲舒ハイツガワシカラズ、閑ニヲモムロアルノ謂也。

天命を受入れそれを表現する器である。従って心が正しくないときはそれが容貌に表れるものであって、容貌を美しくするためには心を正しく保っていなければならない。威厳のきまりを詳らかにし、君子としての容貌を心がけるべきである。（『岩波思想体系 山鹿素行』）<sup>14)</sup>

以上はこの「母不敬」の大意であるが、私はこの節の中に鎮信が志向してやまなかった茶への思いが見て取れるのである。茶は礼に始まり、礼に終わる。感情を押し殺し、客に対して最大の配慮をし、慎み深く奢らない。さらに動作を最小限にし、心の充実を図るために、茶筌を振る風貌は極めてすがすがしいものである。

#### 第2節 仙境に到る茶道

##### 一沢庵宗彭とのかかわり—

古来、茶道成立には、禅の影響が濃厚にみられる。それは、両者が精神的に求めるところ、抛ってたつところに深い共通性があったからであろうと思われる。すなわち、「茶の湯とは、ただ湯をわかつて茶をたてて吞むばかりなるもの

と知るべし」(利休)とされる茶の湯が一方でまた「露地はただ浮世の外道のなるに心の塵をなぞ散らすらむ」(利休)という独自の境地を求め、精神的所為＝「道」であるべきだという一点において、茶と禅と切り結ばざるを得ないのでなかったろうか。茶道の最も重要な根拠の一つとして、なかば神聖視されている「南方録」のなかには、次のような表現も見られる。

「侘の本意は清浄無垢の仏世界を表して、此露地草庵に至りては塵芥を払却し、主客ともに直心の交わりなれば、規矩尺寸式法等あながちに云うべからず。火を起し湯を沸かし茶を喫する迄の事也。他事有るべからず。是即ち仏心の露出する所也。作法挨拶に拘る故、種々の世間の義に墮して、或は客は主の過ちを伺い誇り、主は客の過ちを嘲る類になりぬ。此仔細熟得悟了する人を待つに時なし。趙州を亭主にし、初祖大師を客にして休居士と此坊とが露地の塵を拾ふ程ならば、一会は調うべきか」

鎮信も若年の頃から多くの著名な禅僧に師事しているが、そうした禅僧との出会いが「鎮信の茶」の成立の上で決定的な意味を有していた。ここで松浦鎮信が著した「茶湯由来記」と相通ずるものがある「茶亭之記」の一節を、二、三引用して検討してみたい。

「イ）されば、竹蔭樹下に小室をかまへ、水石を貯へ、草木を植、炭を置、釜を掛、花を活、茶具を飾、皆是山川自然の水石を一室に移して、四序雪月花の風景を翫び、草木榮茂の時を感じ、客を迎えて礼敬をなす。松風の颯々たるを釜の中に聞て、世上の念慮をわすれ、瓶水の涓々たるを一杓より流して、心中の塵埃を洗う。真に人間の仙境なるべし。(『茶亭之記』)<sup>17)</sup>

「されば、木を植えて路地となし、庵を結んで数寄屋とし、石を据えて経路となし、諸色置合等、なんぞ天地無用の実理を離れむや、其の心配は知発せざればと、のほらず。常に事を聞ならひ見ならひて心に会得

し、格致するを専一とすべし。(『茶湯由来記』)<sup>18)</sup>

「ロ）礼の本は敬にして其用は和を貴とす。是孔子の礼に体用をいへる詞にして、則茶の湯の心法也などは、貴人公子の来坐にても、其交淡白にして、しかも諂ふ事なく、又、我より下輩の会席にも、敬をいたして、しかも不慢。(『茶亭之記』)<sup>19)</sup>

「ハ）本朝ももかあれど、取りわけ茶礼ばかりこそ今代までたしかに傳て、たかきもいや、しきも茶礼に向かいては、恭敬の本作をもつぱらとして、懈慢の邪念も退けぬる有りしがたき道にあらずや。(『茶湯由来記』)<sup>20)</sup>

「ニ）今少し能く知れば、凡夫の信ずるにては、破るにでもなく、道理の上にて尊信し、仏法はよく一物にして真理を顯す事にて候。(『茶亭之記』)<sup>21)</sup>

「三）理をはなれては、一事も調かたし。ただ所作のみにして、理をもてせざれば、見も、の。様に成り行きてえきなし。元来茶礼とて、礼の一条なれば礼と樂とをさらず。(『茶湯由来記』)<sup>22)</sup>

以上に見られるように、鎮信の茶は沢庵の教えそのものと言えよう。鎮信は沢庵の影響を随所に受けているともいえる。そもそも常に死と直面することを余儀なくされていた(『戦闘者』としての)武士の内には、禅に傾倒するものが多く、逆に禅は臨濟宗・曹洞宗のいずれにせよ、その成立の経緯からしても武士の仏教という色彩を濃厚にしていた。そして「戦闘者」としての武士道から、「為政者」としての士道へと大きく武士の理想的在り方が転換しはじめた鎮信の時代にあっても、なお禅は武士の「嗜み」「教養」として圧倒的な意義を有していたはずなのである。鎮信も当然のことながら、武士としての気概、大名としての心構えを涵養するために禅門を叩いていたものと思われる。しかし

ながら、茶の湯において一派をなすことを志す鎮信にとって、禅はまた「茶の道」を教導してくれる格別の教えとなっていたのではなかろうか。そうした僧侶の中でも鎮信が特に大きな感化を受けたのが沢庵宗彭（1573～1654 天正元年～天保2年）である。沢庵宗彭は江戸時代前期の臨済宗大徳寺派の僧侶。但馬国出石に生まれ、俗姓は秋庭氏と称した。天正10年（1582）、浄土宗・唱念寺の堪蓮社衆誓につくも、禅への思いは深まり、同14年（1586）、勝福寺に移って希先秀先について受戒、秀喜と名を改める。後に、大徳寺の春屋宗園に師事して諱を宗彭と改め、その法を嗣いで、沢庵の号を授けられた。慶長14年（1609）大徳寺153世となっている。更に徳川三代将軍家光の帰依を受け、品川に東海寺を開いて住持となり諸大名に多大な影響を与えた。沢庵の書のいくつかの中で、本編は特に「茶亭之記」の一文を上げて考察する。

茶の湯は、天地中和の気を本として、治安安穩の風俗となれり。然るを今の人は偏に朋友を招く会談の媒とし、飲食を快とし、口腹の助とす。且茶室に美を尽し、珍奇の品を揃へ、手の巧みなるを誇り、他人のつたなきを嘲る。みな茶の湯の本意にあらず。されば、竹蔭樹下に小室をかまへ、水石を貯へ、草木を植、炭を置、釜を掛、花を活、茶具を飾、皆是山川自然の水石を一室に移して、四序雪月花の風景を翫び、草木榮茂の時を感じ、客を迎えて礼敬をなす。松風の颯々たるを釜の中に聞て、世上の念慮をわすれ、瓶水の涓々たるを一杓より流して、心中の塵埃を洗う。真に人間の仙境なるべし。礼の本は敬にして其用は和を貴とす。是孔子の礼に体用をいへる詞にして、則茶の湯の心法也などとは、貴人公子の来坐にても、其交淡白にして、しかも諂ふ事なく、又、我より下輩の会席にも、敬をいたして、しかも不慢。是空空中に物ありて和らひて、猶敬す。迦葉の微笑。曾子の一唯。真如玄妙の意味。付加説の理なりとは、

茶処をかまへるより、茶具の備へ、手前会席衣類等に至るまで、陋しからず。美麗を好まず。道具を以て、心新にして、四時の風景を忘れず、不破、不貪、不奢、謹て不疎、直にして真実なるを、茶の湯といふなるべし。是則天地自然の和気を翫び、山川木石を炉辺に移して、五行備る。天地の流れをくみて、風味を口に味ふ。大なる哉。天地中和の気をたのしむは、茶の湯の道なるべし。  
（土岐頼行宛書簡「結繩集」「万松祖録」）<sup>15)</sup>

一方また、沢庵について忘れてならないのは、武道に造詣が深く、柳生但馬守宗矩と親交が深かったことである。なかでも沢庵が但馬守に与えた「不動智神妙録」<sup>16)</sup>は剣禅一如を説き、日本兵法の確立に大きな影響を与えたものとして有名である。その内容は仏法を通じて剣を説き、剣に生きる姿勢を問うなかで、人が人として生きる道を説き聞かせたものである。剣術家柳生に対して、政治家として、主人として、人間としての生き方が説かれている。ここで沢庵が最も強調したのは、自分が自分になりきり、自分に徹しきることであり、他者に惑わされることのなくなったとき、道が豁然として開けるということであった。そうした剣禅一如の思想は、茶の道を極めようとする若き鎮信にとって、まさに「茶禅一如」の指標たり得たのではなかろうか。

「諸仏不動智と申す事、不動とは、うごかずといふ文字にて候。智は智慧の智にて候。不動と申し候ても、石か木かのように、無性なる義理にてはなく候。向ふへも、左へも、右へも、十方八方へ、心は動き度きやうに動きながら、卒度も止まらぬ心を、不動智と申し候。」

「仮令一本の木に向ふて、其内の赤き葉一つをみて居れば、残りの葉は見えぬなり。葉ひとつに目かけずして、一本の木に何心もなく打ち向ひ候へば、数多の葉残らず目に見え候、葉一つ心にとられ候はば、残りの葉は見

「えず一つに心を止めねば、百千の葉みな見え申し候。」

「是を得心したる人は、即ち千手千眼の観音にて候。然るを一向の凡夫は、唯一筋に、身一つに千の手、千の眼が御座して難有と信じ候。又なまものじりなる人は、身一つに千の眼が、何しにあるらむ、虚言よ、と破り譏る也。今少し能く知れば、凡夫の信ずるにても破るにてもなく、道理の上にて尊信し、仏法はよく一物にして其理を顕す事にて候。」

### 第3節 不生の仏心に生きる茶

#### 一 盤珪永琢とのかかわり

臨済宗妙心寺の僧である盤珪永琢（1622～1653 元和8年～元禄6年）は、江戸時代前期における最も卓越した禅僧の一人で、「不生禅」を提唱して大きな波紋を投じ、宗派を超えた新しい禅の在り方を追求したことで知られる。「盤珪禅師行業曲記」によれば、その教化は播州を中心に、遠く江戸、四国、九州にまで及び、得度を受けて出家の弟子となるもの400余名、法名を授かって在俗の弟子としての礼をとるもの5万余人、教化に浴したものの無数と言われている。また、廃寺を復興すること47ヶ寺、勧請されて開山となった寺は150ヶ寺とされ、当時まさに「生身の釈迦」として広く崇敬を集めていた。盤珪は当時隆盛を極めていた看話禅（公案禅）に対してそれを批判し、不生禅を説いたのである。彼は易行としての禅を説き、難解な仏語祖語によらぬ平易な日常語（平話）による講和。その中心に「不生の仏心」を主張した。

たとへば不生と申ものは、明かなる鏡のやうなものでござる。鏡といふ物は、我に何にても映りたらば、見ようとは存ぜねども、何にても鏡に向へば、其貌が映りませいで叶はぬ。また其映る物をのけたらば、此鏡が見ますまいとは存ぜねども、取のければ鏡に映らぬ不生の氣と申物でござる。何にてもあれかし、見ませう聞きませうと存じたる上に

て、見聞いたすは仏心でござらん。前かどより見聞致さふとも存ぜず、物が見えたり聞えたりするが、面々に仏心そなはりたる徳でござるによつての事でござる。是則不生の心でござる。

不生というものが鏡のようなもので、見ようと思わなくても映るものであるが、鏡を取り除いても、そこにあるものが不生の氣である。見ようとか聞こうとかしなくても、物が見え、聞こえることがそれぞれのもつて仏心を備えた徳である。これが不生の心である。（「盤珪禅師語録及行業記」）<sup>23)</sup>

我宗は自力にもあづからず、他力にも預からず、自力他力を超たが我宗でござる。念は仮の化想也と知て、取らず嫌はず、起こるまゝ、止むまゝにすべし。響ば鏡にうつる影の如し。鏡は明にして、向ふ程の物をうつせども、鏡の内に影をとどめず。仏心は鏡より万倍明かにして、しかも靈妙なる故、一切の念は其光りの内にきえて跡なし。此の道理をよく信得すれば、念はいか程起りても、妨げなし。

不生禅は自力他力を超えたところに超然としてあり、また願いというものは鏡のごとくして、映るが残らず。仏心も同じで、明るくても光の内に消えて痕跡をとどめない。（「盤珪禅師語録及行業記」）<sup>24)</sup>

師、有時、仰せけるは、身どもが法は、諸方のごとく、目あてをなして、或は是を悟り、或は公案を拈する事なく、仏語祖語によらず、直指のみにて、手がりのなき事故、すなをに肯ふ者なし。第一、多智聰明の者、知解情量に碍へられ、肯ひがたし。却て尼かゝの様な文盲の者、はたらきがなき故へ、推立てゝ師家にはせられねども、たしかに信得徹して、頭をめぐらさざる者の多し。又曰、直健十成に肯ふ者なしといへども、身共が法語は金子のまるかせ



を、打砕き散したる様なもので、一分とりたる者は一分光り、二分とりたる者は二分光り、乃至一寸、二寸、分相應に利益あらずと云ふ事なし。

法は仏語、祖語などによるよりもまずは、素直で純な気持ちが一番である。盤珪に言うように、法の教えはいたるところに散っているが、それを拾い上げて学べば光が見えてくるのである。真実を学ぶ法の中にある真理を学ぶことが、多智聡明であるより大切なのだ、と説いているが、茶もまた作法の良し悪しより茶に宿る心のあり方が重要なのである。（「盤珪禅師語録及行業記」）<sup>25)</sup>

こうした文章の比較に見られるように、盤珪は直接、鎮信に影響を与えており、天祥庵（寺）<sup>26)</sup>の開山に盤珪をおいたことをみても、その親交の深さがしのばれる。不生禅をもって人間の生き様を説く盤珪に鎮信は深く教を請い、鎮信の茶道に禅の教えが随所にみられるのもこのためである。例えば、鎮信の茶の精神を鎮信自ら著した「茶湯由来記」には、

イ) また春のあしたに花の散を見、秋の夕暮れに木の葉の落るを聞、野中の水を汲み、秋萩の下葉を詠めとあり。春夏秋冬に至り、四季相應に心をよせ、寒暑風雨霜晴陰時の変に順ひ、其の品かわるといへども、心のおもむく所は同じ。

ロ) すがた、多からんとすれば、其の心たらず。心こまやかなれば、其のさまいやし。ゑんなるは、たわれすぎ、強きは懐かしからず。此の心あしたに思ひ、夕部に工夫すべし。

ハ) ただ法にして、任運の道にして、柳は緑、花は紅、風雲流水のすがたおのずから不可説のみちなれば、我師にあらずといふ事なく、我手習にもれたる事なし。

二) かく身心じゅくし、はつめいして自然の境涯に入りては、自ら乾坤を吞却するの器量にあらずんば、この味わひを知らじ。

こうした言葉一つ一つに「茶禅一味」の心境がうかがえる。盤珪に師事した鎮信は禅のもつ哲理に自己の生き様を収斂させていったのである。

## おわりに

本稿においては、松浦鎮信がどのように茶道に入っていこうとしたか、時代背景を考察しながら検討してみた。時代の不安定さが大名にもたらした影響、また平戸藩自体の政治・経済危機、この中で動揺し焦燥する心を平穩に保つために、鎮信は茶の世界へと傾注していったのではないか。天文学、易経、禅、神書、蘭学、兵法等あらゆる分野の学問を学ぼうとしたところに、鎮信が自己涵養、自己鍛錬の場を茶の道に求めた。一方鎮信は、松浦藩の藩主であり大名という為政者でもあった。当時の松浦藩は先述したように、オランダ商館が長崎出島に移り、一寒村としての出発であった。このほかにキリスト教と仏教の軋轢、島原の乱への遭遇、浮橋主水事件に見られるように、藩士の掌握にも苦慮するのであった。このような中で、鎮信は経済の立直しから着手したのである。ここに為政者としての茶道を見ることができる。経済そのものは財政の管理であり、これはとりもなおさず社会組織の管理、資源運営の管理となっていく。松浦藩の領地における資源の管理運営でもあった。鎮信はこのために松浦藩士の人づくりを必要とした。ここに「経国済民」思想が生じる。つまり、経済の営みは天地の真理への理解が不可欠であり、また経済運営の根本は人の徳にあるということが、鎮信の時代の経済思想でもあった。

自己の陶冶としての茶道と大名としての為政者の茶道。次年度の論叢にて為政者としての茶道の理論を取り上げてみたい。

注

1) 松浦素「茶道の心」

2) 早岐新田と川下新田相浦新田がある。早岐新田は松浦旧記によれば、承応2年(1653)の頃に「早岐三枝より嶺ヶ原まで長さ300間の堤防を築き、同じく宮崎に250間の築堤をなす。これにより新田12町余歩を生じ、人家40余軒を建設す。」という平戸藩の農地改革。慶長9年(1604)61,700余石のものが、52年後の明暦2年(1656)には104,895万石余りとなり、更に8年後の寛文4年(1664)には4,600石を増加し、109,490余石となり、明治維新直前には11万余石となった。川下新田相浦新田の干拓は明暦元年(1655)に起工し、同6年12月に竣工し、反別100町8反余歩、作付90町歩を得ている。工事全部の完了は寛文6年(1666)。この干拓が始まるや和泉の国人庄兵衛というものが、農民30戸、家族120人を引率して平戸に來り、新田耕作を願い出て、相ノ浦に移された。

3) 漁業

承応元年(1651)に平戸の田助に小値賀の漁家50戸を移し、次いで壱岐の郷ノ浦に70戸の漁民を移植せしめ、寛文3年(1663)には、同国筒城村の堂崎を拓き、夕部浦の漁民30戸を移し、山崎村を新たに立てるなど、荒蕪地の開墾を海上の開発とを兼ね行った。

4) 三川内陶工場・平戸焼

寛永13年(1636)隆信は今村三之丞を迎え、三川内に帰らしめ、翌年長葉山に諸藩用の製陶場を建てた。是において、三之丞は椎の峯より福本・山内・前田の3人を招請し、おおいに事業の向上の努めた。三川内焼きは隆盛となった。次に如猿があらわれ、隆信は多くの支援をほどこし、おおいに陶技の研究を奨励したので、その技ますます進み、寛文2年(1626)作品を幕府に進献するや絶賛を博し、各藩よりの注文も増加した。藩主(鎮信)は彼を馬廻役とし、禄100石を給する事とした。

5) 松浦伯爵家編修所「心月庵と鎮信流茶道」1-4頁

6) 平戸と密貿易

元和初頭(1600年頃)、平戸にいた顔思齊は八幡船と結託し、台湾を根拠地として近海に猛威を振るった。部下には鄭芝龍がいた。その後、鄭成功が活躍、彼らの記録から平戸では商人がシナ人と結んで密貿易を行っていた事を物語っている。寛永5年(1626)浜田彌兵衛が台湾のオランダ人

を攻めたのも、密貿易が原因であった。

伊藤小座左衛門は博多の商人で、長崎・平戸・五島に支店を置き、数十隻の船を使って密貿易を行っていた。主に鉄を輸入し、又、刀剣・鉄製品を輸出して、巨万の富を得ていたが、発覚し小左衛門を始め、平戸の松浦庄兵衛の手代宗助ら多数厳罰に処せられた。末次平蔵は長崎代官の職にありながら陰で密貿易を営んでいたもので、やがて発覚した。

7) 天草・島原の乱と平戸藩

寛永14年12月平戸藩では、花房権右衛門が先発して雑兵200人、三浦市之丞が後続隊として200人、松浦大学内匠が本隊として500人を統率して出発。乱は寛永15年に平定して、幕府はこれより一層キリスト教の弾圧を厳しくしたので、各藩は信徒の改宗を迫り、応じない者は殺し、或いは海外に放逐した。平戸は西洋に向かって、多くの文明を受け入れてきた実績を持つが故に、25代隆信(道可)公の時に、天文19年(1550)にはじめて、ポルトガル船が平戸に入港、弘治3年(1557)に度島の籠平田左衛門宗経とその子同苗左衛門安一と娘が洗礼を受け、度島と生月にて布教を行なう。2ヶ月にして度島に600人、生月に800人の信者を得た。また、平戸に帰り、ここで1300人を教化し市中に3教堂を設けた。

道可公隆信の時代、永禄4年(1561)、キリスト教徒は、宣教師の教えに従い、仏教を持って邪教となし、僧侶は虚偽欺瞞の悪魔とし大小の仏像を破却した。是において、仏教・キリスト教徒の間に激烈な争いがおこった。平戸宮前の騒動は最も激烈で宣教師船長以下乗組員3分の1のポルトガル人が殺された。ポルトガル人は怒って平戸を引揚げ、大村領の横瀬浦に移った。

「大曲記」に「大村殿をして横瀬浦に町立て、南蛮船を呼び、取被成候。大村純忠キリシタンに御成候間、諸国の商い船も平戸の瀬戸を打通り、横瀬浦へとなをりければ、知可に居住の旅人も横瀬浦へとなをり候間、平戸は大方物さびしく成候事も仔細ある事にて候……」とある。以って平戸の被った打撃の程は知る事ができる。

8) 浮橋主水事件

寛永16年(1636)、平戸藩主隆信の死去の折、当然殉死すると思われた浮橋主水は生き長らえた。そのことを多くの人が侮辱し、怨み、松浦藩はキリシタンであると幕府に密告した。幕府は江月和尚を派遣し、隆信の菩提寺の大藍建立をした。又、

外国人の遺骨を発掘して、海中に投棄するなどして江戸和尚の信頼を得た。

9) キリスト教禁止令と平戸藩

平戸藩は多くの打撃を被った。寛永16年には、幕府は平戸のオランダ商館を長崎に移し、平戸にいたオランダ人6人、イギリス人とその子女11人に退去を命じた。この時、退去を命ぜられた婦人が後年海外より母国の同胞に寄せた書信ジャガタラ文は有名である。

10) 松浦 素「茶湯由来記」浪速社31, 59頁

11) 田原嗣郎・守本順一郎編「岩波思想体系32 山鹿素行」岩波書店1982 31-33頁

12) 松浦 素「茶湯由来記」浪速社31, 59頁

13) 「岩波思想体系32 山鹿素行」60頁

14) 「岩波思想体系32 山鹿素行」73・74頁

15) 土岐頼行宛書簡「結繩集」「万松祖録」

16) 沢庵宗彭（池田 諭編）「不動智神妙録」徳間書店1968

17) 鈴木大拙「鈴木 大拙全集」第11巻『禅と日本文化』岩波書店1999 101-102頁

18) 松浦 素「茶湯由来記」浪速社31, 59頁

19) 「鈴木大拙全集」第11巻『禅と日本文化』101-

102頁

20) 松浦 素「茶湯由来記」29, 30, 48, 49頁

21) 「鈴木大拙全集」第11巻『禅と日本文化』101-102頁

22) 松浦 素「茶湯由来記」29, 46, 47頁

23) 「盤珪禪師語録及行業記」岩波文庫ワイド版1993

24) 「盤珪禪師語録及行業記」98頁

25) 「盤珪禪師語録及行業記」108頁

26) 東京浅草にある。

参考文献

松浦 素 1969 「茶湯由来記」 浪速社

松浦 素 1966 「武家茶道の系譜」 ぺりかん社

松浦 章 2003 「松浦鎮信の茶」 講談社

松浦伯爵家編修所 1933 「心月庵と鎮信流茶道」 篠山書房

桑田忠親 1988 「日本茶道史」 河原書店

桑田忠親 1977 「茶道の歴史」 東京堂出版

海士光朗 1999 「茶の湯歴史と精神」 麻布文庫

谷端昭夫 1999 「近世茶道史」 淡交社

村井康彦 1979 「茶の文化史」 岩波新書